

まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室
准教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

1

平成20年度の榎田ゼミ（4年次生1名、3年次生4名、科目等履修生1名、計6名）では、エスノメソドロジー・会話分析のなかでも、ワークプレース研究（鍼灸診療場面、学生劇団公演場面、就職支援室での面接場面、車椅子バスケットボールの試合場面、スイミングスクールでの幼児教育場面、家族を巡るワークショップ場面＝掲載順、ただし中恵論文を除く＝）に焦点をあてて、調査研究活動を行った。結果として全員が単著での論文執筆をこのゼミ論集でしてくれている。それぞれのテーマの料理の仕方を味わって頂ければ幸いである。

さて、徳島大学総合科学部人間社会学科地域システムコースの特徴は「2・3年次の調査実習が必修となっていること」である。すなわち、この調査実習によって、卒論を書く前に、卒論執筆に必要な能力（現実分析能力と論理的執筆能力の両方）を十二分に身につける、というのが、我々のコースの方針になっているのである。このような方針の調査実習が開講されている元で、ゼミでは何をすべきなのだろうか。ゼミですることは存在しないのではないのか？。そういう疑問が沸いて来かねない本学部のカリキュラムになっているのである。

ところが、調査実習だけでは後者の「論理的論文執筆能力」が十分には身につけていない、というのが、近年の卒論を見ての榎田の理解であった。これらの諸状況を考え合わせて、今年のゼミでは、この後者の部分（論理的論文執筆能力）を充実させるよう、特別にゼミのプログラムを編成した。このゼミでの獲得目標を達成するために、通常日本語のテキスト読解ゼミナル部分以外に、通常データ解析の夏休み通い合宿以外に、英文読解ゼミを秋から冬にかけて開講した。具体的には、ハロルド・ガーフィンケルの有名作品「“Good” organizational reasons for “bad” clinic records」 in 『*STUDIES in ETHNOMETHODOLOGY*』, (1967) を、ゼミ員を3つの班に分けて読ませ、その読みをもとに議論する通い合宿の日程を設定した（中恵真理子君＝科目等履修生＝の原稿が、家族を巡るワークショップ場面を扱ったものから、この論文についてのコンメンタールに変更されたのは、秋から冬にかけての英語演習の影響である）。今回のゼミ論文集がいささかなりとも、文化の香りが漂うものになっているとすれば、それは、この英語読解ゼミ部分の効用もあつてのことだろうと思っている。

とはいえ、やはり両面作戦は大変である。予想されたこととはいえ、データ分析部分に時間を取られ、関連資料の読み込みや先行研究の検討においては、いささか課題を残したままの論文がほとんどとなった。論理的思考力は鍛えようとしたのだが、思考に割くための時間を十分には取れなかったためである。年々学生が忙しくなり、課題を多く与えるやり方では、もはや学生の学習時間を十分には確保できにくくなってきている。来年度以降のゼミ運営においては、さらに新しい対策を組み合わせる必要があるだろう。なんとか、考えていきたい。その一方で、黒住美晴君による第5論文のように、論理的思考力の表示部分にも十分魅力が備わっている論文も掲載することができた。単なる調査報告ではなく、それなりに先行研究との結びつきがあるような論文に仕上がっていることはうれしいことだ。このような水準で4年間の学生生活の締めくくりをなし得たことを本人は誇ってよいと思われる。こんな感じで、十分なものも、ちょっと不十分なものもある論文集だが、読者の皆様の読みではどんな感じになるのだろうか。忌憚のないご批判を頂ければ幸いである（ご意見は、上記電子メールアドレスへどうぞ）。

慣例に従い、扱ったテキストを列挙する。輪読した論文は以下の通り。

- 1) 好井 裕明・山田富秋・西阪仰編1999『会話分析への招待』（世界思想社）の一部。
- 2) 山崎 敬一編2004『実践エスノメソドロジー入門』（有斐閣）の一部。
- 3) 五十嵐素子2008『教育諸概念の実践の論理—教示、学習、知識、能力の社会的組織化—』一橋大学社会学研究科提出博士学位請求論文。
- 4) 川床靖子 2001「流通活動を組織化するアーティファクト」上野直樹編『状況のインタフェース』金子書房、104-139。
- 5) 中村和生・榎田美雄2004「<助言者—相談者>という装置」日本社会学会、『社会学評論』Vol.55, No.2。
- 6) Garfinkel, H. 1967 「“Good” organizational reasons for “bad” clinic records」 in 『*STUDIES in ETHNOMETHODOLOGY*』, Polity Press.

本ゼミ論集は、そのタイトルを『現場で起きていること』としている。世の中には様々な「現場」があり、それぞれの「現場」には、それぞれの「秩序」が存在している。その様相を本ゼミ論集所収の各論文が、わずかなりともつかみ取っているといえるのなら、望外の喜びである。

2

以下全掲載作品について、編者としてのコメントを付し、読書案内としたい。

(1) 齋藤論文（「鍼灸のエスノメソドロジー」）について。

鍼灸の実際の診療場面のエスノメソドロジー的分析は、世界で我々の研究チームしか行っていない。常識的には、東洋医学と西洋医学の違いとして扱われてしまいかねないような内容を、上手に、相互行為に定位して説明している。研究の発展が楽しみだ。

(2) 松藤論文（「子供と学生と一緒に作り出す空間」）について。

ドイツの哲学者アドルノは、ミメシスの知（ものまねの知）を主張したが、子供の遊びの成立場面を取り扱った本論文は、アドルノなら「ミメシスの知」と呼んだらうものが、一体全体どのような相互行為の中で成立しているのかを、解明したものになっている。

(3) 吉田論文（「就職支援室における相互行為分析」）について。

本論文は、「就職支援室らしさ」の研究である。トラブルの原因の中にも、トラブルの解決プロセスの中にも、そこが就職相談をする場所であることが、埋め込まれてある。音響環境よく撮影することに成功したため、会話を微細に研究することができている。「セッティングの勝利」論文、の好適な例であるといえよう。

(4) 前田論文（「障害者スポーツにおける相互行為」）について。

これは、阿部智恵子氏（当時徳島大学人間・自然環境研究科、現在石川県立看護大学）の修士論文および、1999年度の社会調査実習（2000年2月に『障害者スポーツにおける相互行為分析』として報告書を刊行）に関連して収集された車椅子バスケットボール大会のビデオ（実際の試合風景）と資料（車椅子バスケットボールのルールブック等）を、再分析したものである。たとえ、そのルールが派生的なものであっても、使われる道具の特徴などに対応して健常者のスポーツとは違った形でリアリティを持ち始めている「車椅子バスケットボール」の実態を、実際のゲームのシュート場面を集中的に分析することで明らかにしている。障害者スポーツ研究は、近年、杉野昭博氏（関西学院大学）や渡正氏（早稲田大学）によって、新局面が切り開かれつつあるが、そのような全国的な動向（医療や福祉の観点に回収されない研究を志向）にリンクした成果として、本論文は注目に値すると思われる。

(5) 黒住論文（「幼児を対象としたスイミングスクールにおける相互行為分析」）について。

これは、平成21年1月30日に、徳島大学総合科学部に提出された学士の学位請求論文をほぼそのまま再掲したものである。水音が反響して音声ほとんど聞き取れないような苦しいデータの状況を、粘り強い聞き直しと、（バイト講師当事者であるメリットを生かした）参与観察で乗り越えた成果である。山田論文や江原論文の主張の乗り越えに成功しているかどうかは微妙なところだが、大きな筋は外していない。教育学領域でも、臨床教育学会などが動画分析の研究活動を活発化させつつあり、エスノメソドロジーに期待が集まってきている。そのようななかで、今後引用され続けるだけの価値がある論文であろう。

(6) 中恵論文（「“Good” organizational reasons for “bad” clinic records についてのコンメンタール」）について。

エスノメソドロジーの学史研究には、いくつも空白が存在している。ガーフィンケル（本年秋に来日の予定あり）が存命中であるためだろうか、彼の作品についての批判・吟味にいささか滞りが起きているように見える。そもそも構造的に、エスノメソドロジストによる学史研究では、現在その研究者自身が取っている立場からの制約があり、結果として、十全な批判的吟味が自由にはなされていないという感じがある。このような状況の中で、中恵真理子君が挑んだ作品分析の方向性は価値があるものだ。日本の教科書で広く言及されている古典的テキストを、その言及のされ方からまずは把握し、その認識を得たあと、さかのぼって、もとのテキストに照らし合わせて検討をする、という作業は、2009年の今、必要とされている作業だ。残念ながら、本論文では、この作業の前半しかなされておらず、「研究ノート」というような位置づけになっているが、続けての精進が期待される。

＝謝辞＝

今年もまた多くのかたの助力をえてゼミ運営を行うことができた。とりわけ、奈良女子大学助教の中塚朋子氏には、ゼミの夏合宿における長時間討論に参加してもらい、たくさんの助言を賜った。ここに記して感謝する。